

機関番号：32206

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21792276

研究課題名（和文）

死産で引き続く妊娠を経験した父親の語り

研究課題名（英文）

Fathers' perspectives during pregnancy following stillbirth

研究代表者

今村美代子（IMAMURA MIYOKO）

国際医療福祉大学・保健医療学部・助教

研究者番号：20511158

研究成果の概要（和文）：本研究は、死産で子どもを亡くした父親が次子を迎え入れるまでにどのような体験をしてきたのかという語りを記述し、それを通して死産で子どもを亡くした父親へのケアの示唆を得ることを目的とする。3名の父親を対象に半構成的面接を行い、質的記述的に分析を行った。死産後に子どもを授かった父親達は次子を迎え入れるなかで、片時も忘れず妻子を案じていた。周囲には強くあろうと振る舞い、自身の持つ不安と向き合わないようその苦悩は胸に押し隠されていた。次子を育てる中に後悔を抱くきながらも、子どもが残してくれた意味を引き継ごうと目に見えぬ我が子と歩み続けていた。

研究成果の概要（英文）：In order to identify effective approaches to care for fathers who have lost children to stillbirth, the present study describes the narratives of such fathers with respect to their experiences up until the arrival of their next child. Semi-structured interviews were conducted with 3 fathers, and were analyzed using qualitative descriptive methods. Fathers whose wives became pregnant with another child after the stillbirth never forgot the lost child, and were concerned for their wives and new child. Putting on a strong front to the people around them, the fathers suppressed their pain and tried not to confront their own anxiety. Although they felt regret about the lost child as they brought up their next child, fathers forged a relationship with the lost child in an attempt to find meaning in the child's death.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：①医療・福祉、②看護学、③社会学

1. 研究開始当初の背景

喪失を体験した後の妊娠は、夫婦にとって一概に喜びに満ちたものとは言えない。次の

妊娠を迎えた母親に関して、様々な心理尺度を用いた研究が先駆けて取り組まれている中、最近では父親も子どもの喪失体験の衝撃

により、その後の妊娠において精神的ストレスが Armstrong, Deborah S. (2004). 増加することがわかっている (Armstrong, 2004)。父親にとって、喪失後の妊娠には喜びと不安とが混乱した気持ちになるものであるとし (Samuelsson et al. 2001)、更により一層の不安をもたらすことが一般的であることを明らかにした (Armstrong, 2001, Turton et al. 2006, O'Leary & Thorwic, 2006)。また、現在の妊娠に何か悪いことが起き得るかという危機感が高まり、不眠等の不定愁訴も増加が見られたり、以前に子どもを亡くした週数を“重要な段階”と考え、その週数が過ぎるまでは特に不安を抱くであろうことを述べている (Armstrong, 2001)。

Turton et al. (2006) は、死産体験後に妊娠をした 38 組のカップルと、死産を体験していないカップルを比較し、次の妊娠をした父親の精神状態と病的状態に移行するリスク因子を明らかにするコホート研究を行っている。そこで報告された父親の対処戦略には様々なものがあり、飲酒量増加者は 22%、死産後に特別な薬剤の処方が必要とした者は 18.4%に見られ、そして 47.4%という、ほぼ半数の父親は病院のカウンセラー等に支援を必要としていた。Turton et al. (2006) は更に、父親は喪失後の次の妊娠において不安や trauma などの病的なストレスに対して弱いものであることを認識すべきであり、また、次の妊娠のタイミングに関しては、彼らはパートナーとは異なったニーズを持っていると指摘した。以上のように、周産期に子どもを亡くした父親に対するケアは父親の持つ特性や変容しつつある社会の流れをも含めて、父親の体験するありのままの世界を理解した上で、考えられなければならない。このため、周産期喪失における父親の理解を深める研究が求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、死産で子どもを亡くした父親が次の妊娠を知り、その出産を迎え入れた時期までに、どのような体験をしてきたのかという語りを記述することであり、それを通して死産で子どもを亡くした父親へのケアの示唆を得ることである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

父親の語りを通じて記述する質的記述的研究である。

(2) 研究協力者

死産で子どもを亡くした父親で、以下の条件を満たし、研究協力の承諾が得られた 3 名とした。①妊娠 12 週以降の死産により子どもを亡くした父親。②喪失からの期間は原則として 1 年半以上、10 年未満。③日本で死産を経験した、日本語が話せ読み書き出来る方。研究協力者は以下の手順を経てリクルートした。セルフヘルプグループの代表者から、悲嘆の状況が落ち着き、語る体験が精神的負担にならないと予測された方を紹介頂いた。その後、研究者より研究の主旨・方法、倫理的配慮、研究公表の可能性を口頭および文書を用いて説明し、同意を得た。

(3) データ収集の方法

データ収集は、インタビューガイドを用いた半構成的面接法で行った。なお、インタビューガイドは本研究の窓口である、周産期喪失体験者かつ心理学の専門家であるセルフヘルプグループ代表者に先だって確認してもらい、模擬面接を行った。死産を経験した父親の研究が少ないことや、他者に自身の内面を開示しない等の男性特有の背景を踏まえ、研究協力者の立場が脅かされぬよう、研究協力者のペースに沿ってインタビューを進めた。インタビューは原則として 1 人 1 回、協力者の意向に添って延長をした。場所は、

研究協力者が希望する場所・時間帯に協力者の自宅とした。インタビュー終了後、語りの全体を通して、協力者に付け足して話すことの有無を問うた。

(4) データ収集期間

2010年9月から2011年3月であった。

(5) データ分析の方法

本研究は、死産で子どもを亡くした父親の持つ複雑で困難な体験に近づくために、現象学的アプローチを参考にした。分析は、Giorgi (2004) の分析手順を参考にして、以下の過程を辿ることを目指した。①インタビュー内容を逐語録に起こし、そこにインタビューの際に観察したデータを加えて丹念に読み込み、語りの記述全体を把握する。②逐語録を読みながら、死産で子どもを亡くした父親の体験を、妻の妊娠中、子どもの喪失、現在に至るまでの時期に分ける。③逐語録の中で、同じ状況について語られている部分、それに付随する感情の表現を一つの構成要素とし、その状況を研究協力者がどのように意味付けているのか把握する。④各構成要素を、それを特徴づける研究協力者が実際に語った言葉で表す。⑤研究協力者の実際の言葉を、研究者の言葉に置き換えながら構成要素ごとに記述する。⑥各構成要素を経時的に並べ、父親の体験した世界を一つのストーリーにまとめ、研究協力者に記述内容に相違がないか確認をして頂、内容の追加・修正を行った。⑦研究協力者の個々の記述を繰り返し読み、体験した世界を研究者が解釈し、体験の中心的な意味を見出す。⑧個々の研究協力者の記述から現象の全体構造を把握し、共通する意味の類型化を試みる。データ分析の際には、データの信頼性と妥当性を高めるために、データの収集・分析・解釈の過程において、研究初期段階より母性・助産学、および社会学の専門家、さらに周産期の喪失に取り組む専

門家と、死産体験者かつ心理学の専門家によるスーパービジョンを受けた。

(6) 倫理的配慮

本研究への協力は自由意志に基づくものであり、いずれの時点においても拒否による不利益は生じないことを保証した。面接時は、心理的な脅かしを防ぐことに細心の注意を払い、データの匿名性を確保し、プライバシーを厳守した。万一、研究協力によって協力者に精神的負担が生じた事を想定し、セルフヘルプグループの運営者にフォローアップを依頼する体制を整えた。なお、本研究は国際医療福祉大学倫理委員会の承認を得られたのちに実施した(2009年8月25日承認:承認番号09-56)。

4. 研究成果

3名の研究協力者は、死産後に次子を迎えるまでに2年7ヶ月～3年9ヶ月を経過しており、第1子を亡くした父親2名、第2子が1名であった。また、インタビュー時、次子出産から5ヶ月～1年3ヶ月を経過していた。

父親達の体験は、それぞれのコンテクストと照らして初めて理解される固有のものであったが、同時に彼らに共通する思いと体験の意味が確認された。

まず、死産後に次子を迎える父親体験を、その中心的な意味を示してからその意味づけとなった体験を構成要素ごとに記述した。そして、最後に、協力者の体験の特徴を挙げて類型化し共通点を明らかにした。

(1) A氏の体験

A氏(30代)は、第1子の男児a君を常位胎盤早期剥離により妊娠39週で亡くしていた。喪失から2年7ヶ月後に次子が誕生している。

A氏にとって、死産後に次子を迎える体験とは「周囲の無知に傷つけられるのを恐

れ、次子の妊娠を打ち明けずにいた。妻と亡き子に何もしてやれなかった後悔を抱きながらも、亡き子とともに歩み続けている」という意味があり、それは以下の体験から形成されていた。

① 不安を隠しながら妻子を案じる

A氏は、どのような場面にあっても妻子に気持ちを向け、「仕事も手につかない」、「一日が早く過ぎればよい」とまで考えるようになっていた。「常に（妻子が）大丈夫かなあって考えちゃってね。特に“今日は（妊婦）健診だ”っていう日は、逆に私がドキドキしてたり。（中略）早く、（妻から）“大丈夫だった”ってメールこないかなって待っていたかな。（中略）とにかく、今思うことは“不安だった”ってことに尽きますかね…。」

② 虚しさを抱き、次子の妊娠を周囲に隠す

A氏は、実母が妻と子どもの安否を問うてくる度に「虚しさ」を感じていた。また、A氏は周囲から傷つけられることを避けるために、妻が次子を妊娠しているということを敢えて伝えずにいた。

「（子どもが）元気がどうかは私達が知りたいですよ。…でも、親には“大丈夫”って安心させてたかな（中略）周りもいつ生まれるのか、男か女かって聞いてきた人がいてね…それって本当に腹が立つって言うか、なんとも言えない。そうだねーって、濁す感じ。」

③ 次子の成長とともに後悔の念が増す

A氏は、次子を育てる中に相反する思いが存在していた。「今の子が順調に成長していった安心をくれる分、（亡き子には）もっと何かをしてやれたんじゃないかなって思うんです。今、幸せだなんて感じる分ね…1秒でも早く病院に連れて行ってたら、助かったかもしれないかね。」

④ 亡き子がくれた力を信じようとする

妻の妊娠に関しては絶えず不安があったというA氏だったが、心の隅には亡き子からの力添えを「信じたい」という思いも存在していた。「まさか今回は死産に…なんて考えちゃったけど、でも神頼みっていうか、心のどこかで“前の子が力をくれて守ってくれているから、大丈夫”ってふうにも考えたこともあったかな。（中略）aは今も家族を空から守ってくれているんだと思う。変と思われるかもしれないけど、そう思えるんですよね。」

(2) B氏の体験

B氏(30代)は、第2子の女儿bちゃんを心臓奇形により妊娠38週で亡くしていた。喪失から3年2ヶ月後に第3子が誕生している。インタビュー当時、第1子の長男は5歳であった。

B氏にとって、死産後に次子を迎え入れる体験とは「同じ病により子どもを失うのではないかという不安から、次子妊娠を隠さなければならない。妻子にとって、最善かつ納得できる体制を整えることで、自身の心の安定も得る」という意味があり、それは以下の体験から形成されていた。

① 同じ病気で再び子どもを失うのではないかという心配を抱く

B氏は、医師からの勧めもあり、死産後の解剖から心臓に疾患があったと知らされていた。「お兄ちゃん(第1子)は、順調に育ってくれていますよ。でも、もうすぐ（生まれる）って時にbを亡くしたんで、やっぱり何が起るかわからない。ずーっと心配でしたよ。…もしかしたら、また同じ病気を持って生まれてくるんじゃないかって。親族に心臓が悪い人なんて居ないから、たまたまなのかなって思うようにはしてはいたけど。」

② 同胞に次の妊娠を隠さなければならない

B夫妻は普段から長男とは何でも共有する関係であった。しかし、妊娠に関しては、「妻のお腹が目立つようになった時期によく」上の子に伝えていた。

「お兄ちゃんの世界もあるんで、僕も、そう心配した顔してるわけにはいかないですよ。5歳にもなると、色々感じとっちゃうかなって。なるべく僕もニコニコしようとも思って(中略)…今回、お兄ちゃんには“うちに赤ちゃん来るよ”って言ってよいのかも悩みましたね。幼稚園で色んな事を周りに言っちゃうからね。でも、隠してると…お兄ちゃんにも、bにも、お腹の子にも申し訳ないって思いもあってね。」

③ 不安からの脱却を願い、納得できる医療体制を自ら探し出す

B氏は妻の妊娠を知ると、自ら大きな病院を探し、「(妊婦)健診に同行したい」と考えた。「どうして心臓に病気があってことがもっと早く分らなかったのかって…もし分かっていたら、それに備えられたじゃないですか。難しいことだし、仕方ないかもしれないけど。だから今回は前の時よりもエコーでよく診てくれる病院を探したんです。とても慎重に診てくれたからこそ、ああ、ここで産んでいたらなって。」「だからエコーを長めにしてもらおうとか、早めに帝王切開してくんないか(健診の際に)先生に頼みに行っただす。」

④ 亡き娘の面影を重ね合わせ成長を見守る

C氏は健診で超音波診断の画像を見せてもらうことで、「安心」を得ていた。当時の健診での様子をにこやかに語った。「やっぱり女の子ってかわいいですよ。…かわいかった！bは妻に似ていたんですよ。だから今回、エコーで顔の部分を見せてもらったときに、うわー、bに似てるかもって思ったら嬉しくて。一瞬、Bが戻って

きたのかな一つ。でも、(第3氏は)男の子だったから、また男かあって。」

(3) C氏の体験

C氏(40代)は、第1子の男児c君を子宮内胎児死亡により妊娠32週で亡くしていた。解剖は行わず、死因不明であった。喪失から3年9ヶ月に次子が誕生している。

C氏にとって、死産後に次子を迎え入れる体験とは「待ち望んでいたはずの妻の妊娠に戸惑いを抱く。保証のない未来に怯えながらも妻を支え、父親としての役割を見出してゆく」という意味があり、それは以下の体験から形成されていた。

①待ち望んだはずの妻の妊娠に戸惑う

C氏は子どもを亡くした後、悲しみから逃れるためにも、すぐに次子を授かりたいと考えていた。しかし、「待ち望んでいた」妊娠をした妻は以前より増して不安を口にするようになった。その様子を見て、C氏は「本当に授かって良かったのか」と自問自答を繰り返した。「cを亡くしてから、妻の様子がだいぶ変わってしまったんですね。だから、早く子どもを授かれば、(妻も)以前のように明るくなるんじゃないかって考えてたけど、そうでもなくて…(中略)むしろ、もっと不安を大きくした妻をみたんですね。」

②保証のない未来に怯えさせられる

C氏は、自身の不安を外には表さず、自身の在り方に関して思いを巡らせていた。「いつも、僕が(妻に)“大丈夫、大丈夫”って言ってたかな。でも、何をもって“大丈夫”って言えるのかって私も苦しくなってね。(中略)…私が安心させてあげないとね。でも、安心なんてことは存在しないって思っちゃってるし、二人ともね。(中略)私だって、本当は怯えてましたよね。」

③妻の自責の念を払拭し、妻子を守る

「前回、初めての子はお腹の中で死んでしまったんで、それ以来(妻は)ずっと、“お腹の環境が悪いのか”って自分を責めていたんですね。だから次の妊娠が判ったときは、それを払いのけてやりたいなあって…子どもも妻も守りたい、今度こそはって…」

④父親・夫らしい役割を果たしたい

C氏は、亡き子の成長過程により添えなかったことを、いまなお悔やみ、次の妊娠経過には妻子に目を向けた関わりを持ちたいと願っていた。「前の子がお腹にいるときは、ずっと出張ばかりでお腹もよく撫でてあげられなかったんですね。だから、寂しい思いをさせていたんじ

やないかなって。それであんなことにもなったのかなって…だから次(子)には、たーくさん話掛けてやろうって思ったんですよ。もちろん妻にもね。」

⑤亡き子の存在を身近に感じる

C氏は次子を迎え入れ、その成長を喜ぶ反面、辛さも体験していた。「下の子が大きくなるたびに、お兄ちゃんがおつきくなってたらなって想像するんです。生まれた時の姿から成長しないまんまの子を思うと辛くなるけどね。最近は大きくなった3歳の姿を想像できないことが辛いかな。でもね、いつも傍に居てくれることは感じられるって妻と話してます。目には見えないけれど、かわいい二人兄妹なんです。」

(4)死産後に次子を迎え入れた3名の父親の体験の特徴

父親達の体験は以下のようなものであった。①片時も忘れず妻子を案じる、②強くあろうと振る舞う、③次子を育てる中に後悔を抱く、④目に見えぬ我が子と歩み続ける。

死産後に子を授かった父親達は、妻の妊娠経過中いかに不安あったかを克明に語った。父親達は妻子を案じる中にも、上の子の育児、家事、仕事に向けて自らを忙しく動かし、自身の不安と向き合わないようにしていた。その不安は、子どもの誕生を見守るまで軽減することはなく、常に胸に押し隠されていた。次子を育てる中、亡き子には何もしてやれなかったという後悔を抱きながらも、子どもが残してくれた意味を引き継ごうと歩んでいた。死産を経験した父親は、不安の渦中に在りながらも、妻と子の身を案じる生活を続けていた。しかしながら、全員が他者に相談を必要とせず、時に次子を妊娠した事実をも口外出来ず、強くあろうと振る舞っていたことから、男性の苦悩はさらに複雑化されることが示唆された。

(5)死産後に次子を迎え入れた父親への支援の可能性

本研究は、死産後に次子妊娠を迎え入れる父親の体験とその意味を、父親の語りを通じて理解することを目的としたものであり、そ

こから具体的な看護援助を直接導きだすことを意図したものではない。しかし、本研究を通じて医療の現場における次子妊娠を選択する夫婦への支援の可能性を考えることができるのではないか。

男性の育児参画を喚起されるようになった現代においては、父親の意識も大きく変容している。今日の男性は出産・育児に参加することを期待され、すでに大きな役割を果たしていることから、周産期における喪失に遭遇した男性も女性と同じような悲嘆過程を辿ると考えられている (Badenhorst et al. 2006)。これらは本研究において語られた父親達の苦悩と共通しており、喪失後に引き続く妊娠は、両親にとって計り知れない苦悩をもたらすことが示された。父親達は妊娠・出産の主体となり得ないことから、直接的なケア介入が困難ではあるが、彼らが抱く長期に及ぶ苦悩を踏まえ、死産直後から夫婦を継続的にサポートする体制作りが求められている。また、男女間での悲しみの表出の違い、次子妊娠に対する考え方の違いから、夫婦間の不和が生じ得ることも示唆されたことから、医療者には両者の思いに寄り添い相互の理解を促す関わり方が大切になるであろう。

引用文献

- Armstrong, Deborah S.(2004). Impact of Prior Perinatal Loss on Subsequent Pregnancies. *Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing*. 33(6). 765-773.
- Armstrong, Deborah S.(2001). Exploring Fathers' Experiences of Pregnancy after a prior Perinatal Loss. *The American Journal of Maternal Child Nursing*. 26. 147-153.
- Badenhorst, William, Riches, Samantha, Penelope, Turton. & Hughes, Patricia(2006). The Psychological Effects of Stillbirth and Neonatal Death on Fathers: Systematic Review. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology*. 27(4). 245-56.
- Giorgi, Amendeo(2004). 吉田章宏訳・構成, 特別記事経験記述資料分析の実際現象学的心理学の「理論と実践」, 看護研究, 医学書

院, 37(7), 607-619.

McGreal, Diane, Evans, Barry J. & Burrows, Graham D. (1997). Gender Differences in Coping Following Loss of a Child through Miscarriage. *Stress Medicine*. 13. 159-165.

O'Leary, Joann & Thorwick, Clare,(2006). Fathers' Perspectives During Pregnancy, Postperinatal Loss. *Journal of Obstetric Gynecologic & Neonatal Nursing*. 35 (1). 78-86.

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

①染色体異常を持つ子どもを死産で亡くした父親の体験—喪失後1年を経た語りから見えた苦悩—, 鷺尾美代子, 堀内成子. 第7回日本遺伝看護学会学術大会抄録集. p26. 2008年9月. 聖路加看護大学.

②人工死産という意思決定がもたらす思い: 地域でのお話し会の語りから. 堀内成子, 石井慶子, 蛭田明子, 太田尚子, 鷺尾美代子, 堀内祥子. 第7回日本遺伝看護学会学術大会抄録集. p33. 2008. 年9月. 聖路加看護大学.

③ペリネイタル・ロスを経験した両親へのグリーフケア「天使の保護者ルカの会」5年間の活動. 太田尚子, 堀内成子, 石井慶子, 蛭田明子, 鷺尾美代子, 第15回日本臨床死生学会抄録集 p79. 2009年12月. 東京大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今村 美代子 (IMAMURA MIYOKO)

国際医療福祉大学・保健医療学部・助教

研究者番号: 21511158